

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

この部分につきましたは、  
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、  
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、  
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、  
著作権の都合により公開いたしません。

(村上靖彦『交わらないリズム』による)

【注】

○浦河べてるの家——北海道浦河町にある、精神障害等をかかえた当事者の地域活動を支える社会福祉法人。  
○こどもの里——大阪市西成区にある、子どもや保護者の支援を行っているNPO法人。

○当事者研究——当事者が主体となって、自分自身で自分を理解するための研究を行い、またその研究を発表すること。

○オープンダイアログ——患者と医療者、家族などの関係者で対話を行うという精神疾患の治療法。

○東畑開人(とうはた かいと、1983-)——日本の臨床心理学者。

○西川正(にしかわ ただし、1967-)——日本のコミュニティワーカー。

○ウイニコット(Donald Woods Winnicott, 1896-1971)——イギリスの精神科医、精神分析家。

○エリアーデ(Mircea Eliade, 1907-1986)——ルーマニアの宗教学者。

○ギユスターヴ・ギヨーム(Gustave Guillaume, 1883-1960)——フランスの言語学者。

問一 傍線部 a、j のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 空欄 A、D に入れるのに最適な語を、次のア、イ、ウ、エ、オから選び、記号で答えよ。ただし、それぞれの記号は一度のみ用いることができる。

ア まさに                      イ とりわけ                      ウ かりに                      エ あくまで                      オ むしろ

問三 傍線部①について、「背景」となる「二つの文脈」とはどのようなものか。本文に即して、それぞれ五〇字以内でまとめよ。(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問四 傍線部②「こんな風景」について、次の間に答えよ。

(1) 「こんな風景」の特徴を、筆者が最も端的に示した二字の語を、本文から抜き出し、答えよ。

(2) 「こんな風景」と「遊び」は、どのようにつながっていると考えられるか。本文に即して、一〇〇字以内で説明せよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問五 傍線部③「居場所の時間」もこの二つの側面から考えることができる」とあるが、「居場所の時間」にはどのような特徴があると考えられるか、本文に即して、一〇〇字以内でまとめよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問六 「居場所」について説明された内容として、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選べ。

ア 「居場所」とは、人が自由に出入りでき、目的を持たずに存在することができる場所なので、何もしないことも何かをすることも、どちらも可能である。

イ 「何もしない」ということは、誰にとっても大切なことであり、日常の中にあるその時間を見出ししていくことが「居場所」の心地よさをつくり創造性を育むことになる。

ウ 筆者はかつて精神科デイケアで調査を行った経験があるが、「居場所」にいる人々が「何もしない」状況を分析する方法がないので、調査を中止した。

エ 「居場所」におけるごっこ遊びは、社会状況を模倣するものなので、社会を変化させるのではなく、社会状況をそのままに再現し再生産することになる。

次の文章は、『俊頼髓脳』の一節による。これを読んで、後の問に答えよ。

歌の、八の病の中に、後悔の病といふやまひあり。歌、すみやかに詠み出だして、人にも語り、書いても出だして、後に、よきことば、節を思ひよりて、かくいはでなど思ひて、悔いねたがるをいふなり。さればなほ、歌を詠まむには、急ぐまじきがよきなり。いまだ、昔より、とく詠めるにかしこきことなし。されば、貫之などは、歌ひとつを、十日二十日などにこそ詠みけれ。しかはあれど、折にしたがひ、ことにぞよるべき。

(A)大江山生野のさとの遠ければふみもまだ見ずあまの橋立

これは、小式部の内侍といへる人の歌なり。ことの起りは、小式部の内侍は、和泉式部がむすめなり。親の式部が、保昌が妻にて、丹後に下りたりけるほどに、都に、歌合のありけるに、小式部の内侍、歌よみにとられて詠みけるほど、四条中納言定頼といへるは、四条大納言公任の子なり。その人の、たはぶれて、小式部の内侍のありけるに、「丹後へつかはしけむ人は、帰りまうで来にけむや。いかに心もとなくおぼすらむ」と、ねたがらせむと申しかけて、立ちければ、内侍、御簾よりなから出でて、わづかに、直衣なほしの袖をひかへて、この歌を詠みかけければ、いかにかかるやうはあるとて、ついゐて、この歌の返しせむとて、しばしは思ひけれど、え思ひ得ざりければ、ひきはり逃げにけり。これを思へば、心とく詠めるもめでたし。

道信の中將の、山吹の花をもちて、上の御局といへる所を、すぎけるに、女房達、あまたこぼれて、「さるめでたき物を持ちて、ただにすぐるやうやある」と、いひかけたりければ、もとよりや、まうけたりけむ、

(B)口なしにちしほやちしほ染めてけり

といひて、さし入れりければ、若き人々、え取らざりければ、おくに、伊勢大輔がさぶらひけるを、「あれとれ」と宮の仰せられければ、うけ給ひて、一間ひとまがほどを、あざり出でけるに、思ひよりて、

(C)こはえもいはぬ花のいろかな

とこそ、付けたりけれ。これを、上聞ウこし召して、「大輔ウなからましかば、恥はぢがましかりけることかな」とぞ、仰せられける。

これらを思へば、心ときも、かしこきことなり。心とく歌を詠める人は、なかなか、久しく思へば、あしう詠まるるなり。心おそく詠み出だす人は、すみやかに詠まむとするもかなはず。ただ、もとの心ばへにしたがひて、詠み出だすべきなり。

【注】

○貫之——紀貫之。『古今和歌集』撰者の一人。

○小式部の内侍——母は著名な歌人の和泉式部。

○保昌——

藤原保昌。

○丹後——現在の京都府の北部。

○定頼——藤原定頼。

○公任——藤原公任。

○道信——

——藤原道信。

○山吹の花——花の色は黄色で、襲の色目の梔子色くちなしと同色。

○上の御局——上局うゑつぼねとも。后妃

が天皇の御座所近くに賜る部屋。

○ちしほやちしほ——千入八千入ちしおやちしお。繰り返し何度も染めること。またその色や

染めたもの。

○伊勢大輔——伊勢神宮の祭主大中臣輔親の娘。宮(上東門院彰子)に仕えた。

○宮——上東門

院彰子。一条天皇中宮。

○上——一条天皇。

問一 傍線部アの「後悔の病」とは、歌を詠む際のどのような難点のことを言っているのか、説明せよ。

問二 和歌(A)は、小式部の内侍が定頼に対して、どのような意図をこめて詠みかけたものか、具体的に説明せよ。

問三 傍線部イについて、この場合「心とく詠める」ことが、どのような点で「めでたし」と評されているのか、説明せよ。

問四 和歌の上の句(B)とそれに応じた下の句(C)を、それぞれの詠者の意図に言及しつつ、わかりやすく現代語訳せよ。

問五 傍線部ウは、どのようなことを言っているのか、具体的に説明せよ。



次の文章を読んで、後の間に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

侍従浜松侯有<sup>ニ</sup>好古癖。物聚<sup>ニ</sup>其所好<sup>ム</sup>、古瓦之自<sup>ニ</sup>四方湊至<sup>ス</sup>。蓋<sup>シ</sup>亦累<sup>ニ</sup>数百片。頃者侯自揀<sup>ニ</sup>其最佳者<sup>ヲ</sup>、印以<sup>レ</sup>為譜、徵<sup>ニ</sup>坦題言<sup>ヲ</sup>。攤<sup>ヒラキテ</sup>而觀<sup>ルニ</sup>之、大小無慮百四十余品。皆為<sup>ニ</sup>数百年外物<sup>ヲ</sup>。有<sup>ニ</sup>年号<sup>ヲ</sup>、有<sup>ニ</sup>標章<sup>ヲ</sup>、有<sup>ニ</sup>寺觀堂宇之款識<sup>ヲ</sup>、古色藹然<sup>アリ</sup>、可<sup>レ</sup>掬也。其於<sup>ニ</sup>古今之沿革<sup>ヲ</sup>、與<sup>ニ</sup>時俗之好尚<sup>ヲ</sup>、足以窺<sup>ニ</sup>其一斑<sup>ヲ</sup>而已。坦嘗謂<sup>ク</sup>、物無<sup>ニ</sup>一定之貴賤<sup>ヲ</sup>。因<sup>リテ</sup>時而貴<sup>ニ</sup>賤<sup>ス</sup>之。珠玉金幣<sup>ハ</sup>、拳<sup>レ</sup>世貴<sup>ニ</sup>重<sup>ス</sup>之。而凶年饑歲<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>如<sup>ニ</sup>一握之粟<sup>ヲ</sup>。豈<sup>ニ</sup>必謂<sup>ク</sup>貴重乎<sup>ト</sup>。敗瓦爛甍<sup>ハ</sup>、人皆輕<sup>ニ</sup>賤<sup>ス</sup>之。而<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>是攷<sup>ニ</sup>古今之沿革<sup>ヲ</sup>、徵<sup>ニ</sup>時俗之好尚<sup>ヲ</sup>、則<sup>チ</sup>匪<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>輕賤<sup>ス</sup>焉。然<sup>シテ</sup>不<sup>ニ</sup>獨在<sup>ラ</sup>物也。君相之用<sup>ニ</sup>人材<sup>ヲ</sup>、亦或然<sup>アリ</sup>。寸有<sup>レ</sup>所長<sup>ズル</sup>、尺有<sup>レ</sup>所短<sup>ズル</sup>。苟能器<sup>ニ</sup>使之、無<sup>ニ</sup>不可<sup>レ</sup>使之<sup>人</sup>。今侯於<sup>ニ</sup>古瓦<sup>ヲ</sup>、猶且<sup>ツ</sup>不<sup>レ</sup>棄<sup>テ</sup>、則<sup>チ</sup>其於<sup>ニ</sup>人者<sup>ヲ</sup>、可<sup>レ</sup>知矣。

抑<sup>ソモ</sup>又推<sup>セバ</sup>之<sup>ヲ</sup>、侯<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>尚<sup>たつとじ</sup>古<sup>ノ</sup>道<sup>ヲ</sup>、崇<sup>たつとじ</sup>古<sup>ノ</sup>人<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>遺<sup>オテ</sup>故<sup>ノ</sup>老<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>棄<sup>テ</sup>故<sup>ノ</sup>旧<sup>ヲ</sup>、亦<sup>タ</sup>必<sup>ニ</sup>在<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>好<sup>ム</sup>古<sup>ノ</sup>癖<sup>中</sup>。然<sup>ラバ</sup>則<sup>チ</sup>此<sup>ノ</sup>譜<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>、豈<sup>ニ</sup>可<sup>ケンヤ</sup>二<sup>モテ</sup>翫<sup>ソビ</sup>物<sup>ヲ</sup>喪<sup>シ</sup>レ<sup>ル</sup>志<sup>ヲ</sup>視<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>乎。

(佐藤一斎『愛日楼全集』「古瓦譜引」による)

【注】 ○浜松侯——水野忠邦(一七九四—一八五二)。將軍家慶を補佐して天保の改革を行った。

○湊至——集まってくる。 ○印——拓本をとる。 ○題言——はしがき。

○坦——佐藤一斎(一七七一—一八五九)。儒者。坦はその名。 ○攤——ひろげる。 ○無慮——およそ。

○標章——(瓦の)文様。 ○款識——彫りつけた文字。 ○藹然——盛んなさま。

○可掬——すくいとれるほど多くある。 ○敗瓦爛蕩——こわれた瓦。 ○器使——才能に応じて用いる。

○故旧——古い友人。

問一 波線部 a「自」b「而已」c「不」如「の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「頃者侯自揀」其最佳者、印以為「譜」を、現代語訳せよ。

問三 傍線部 2「豈必謂」貴重「乎」は、筆者はなぜそのように言っているのか。説明せよ。

問四 傍線部 3「然不」独在「物也。君相之用」人材、亦或然」とはどういうことか。説明せよ。

問五 傍線部④「苟能器<sub>レ</sub>使之、無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>使之人<sub>一</sub>」を、書き下し文にせよ。

問六 「古瓦」を愛好することが、「志を喪ふ」ことにならないのはなぜか。本文の主旨を踏まえて一五〇字以内(句読点も字数に含める)で述べよ。